

新 社会福祉士養成課程対応

ソーシャルワーカー教育シリーズ②

新版 ソーシャルワークの
理論と方法 I
【基礎編】

監修
相澤 譲治

編集
津田 耕一
橋本 有理子

まえがき

人々の生活は実に多様化し、生活上の問題も多様化・複雑化している。多様な問題を抱えて生活している人々の生活を支援していくにあたって、ソーシャルワークは、重要な役割を果たしている。クライアントの生活を総合的にアセスメントし、クライアントの意向を十分に踏まえた支援が不可欠となっている。また、分野横断、包括的な支援システム、といったことばに代表されるように、複雑に入り組んだ問題に対し、特定の分野・領域の特定の対象者に限定された支援にとどまらず、ジェネラリストの養成が求められている。加えて、地域福祉の時代にあって、地域にも目を向けたソーシャルワークが重要視されている。そこでは、ソーシャルワークの理論を踏まえ、より専門性の高い支援が求められている。

このような時代背景のなか、社会福祉士養成カリキュラムの見直しが行われ、科目名称にも「ソーシャルワーク」ということば正式に用いられるようになった。地域に根差した生活支援が強調されるなか、ソーシャルワークの役割はますます重要視されるであろう。

本書では、ソーシャルワークの理論を簡潔に整理し、実践モデルや実践アプローチを紹介するとともに、エコシステム理論を取り上げている。ソーシャルワークが「人と環境との関係」を重視し、「環境のなかの人」、「固有な生活全体の理解」として支援を展開するところに固有性の一つがあるといわれている。そのことから、エコシステム理論は重要な考えといえる。それぞれの実践モデルや実践アプローチを別々のものととらえるのではなく、有機的に活用していくことも求められているといえよう。

支援の展開過程では、各局面（フェーズ）について概説しているが、単独で存在するのではなく、つながりのなかで支援の展開が成り立っている。支援過程全体の枠組みや流れを理解していただきたい。

さらに、支援の質の向上に不可欠な記録やスーパービジョンについても最新の動向を踏まえ記述している。

本書は、3巻シリーズの第2巻である。本シリーズの第1巻がソーシャルワークの土台部分を担い、第2巻が枠組みを示した形になっている。本書でソーシャルワークの全体像をイメージしていただき、さまざまなモデルやアプローチの特徴や有効性について学んでいただきたい。

2021年4月

編者 津田 耕一

もくじ

まえがき

本書のねらいと学習内容

第1章 ソーシャルワークの理論	17
1. ソーシャルワークにおける生活理解	17
(1) コンピテンス発揮の支援 17	
(2) 人と環境の交互作用 18	
(3) 固有な生活の全体的理解 20	
2. 生活へのシステム思考と生態学的視座	21
(1) 生活のシステムの理解 21	
(2) 生活への生態学的視座 24	
3. 生活支援へのエコシステム視座	25
(1) エコシステム視座 25	
(2) エコシステム視座の実践化への取り組み 28	
4. ミクロ・メゾ・マクロレベルにおけるソーシャルワーク	29
(1) ミクロ・メゾ・マクロレベルの生活理解 29	
(2) ミクロ・メゾ・マクロレベルでの生活支援 31	
第2章 ソーシャルワークの実践モデルと アプローチの種類と方法	35
1. ソーシャルワークの実践モデル	35
(1) ソーシャルワーク実践の科学化 35	
(2) ソーシャルワークの実践理論 36	
(3) 実践モデルの種類 37	
2. ソーシャルワークにおけるアプローチの種類と方法	39
(1) ケースワークにおけるアプローチの概要 39	
(2) 心理社会的アプローチ 42	
(3) 機能的アプローチ 43	
(4) 問題解決アプローチ 44	
(5) 課題中心アプローチ 45	
(6) 危機介入アプローチ 46	
(7) 行動変容アプローチ 47	
(8) エンパワメントアプローチ 47	
(9) ナラティブアプローチ 48	
(10) 解決志向アプローチ 49	

(11) ジェネラリストアプローチ 50

第3章 ソーシャルワークの過程1 —ケースの発見から契約まで	53
1. ソーシャルワーク過程を学ぶ意味	53
2. ケースの発見	54
(1) ケースの発見が困難な場合とは 54	
(2) ソーシャルワーカーに求められるもの 56	
3. アウトリーチ	56
(1) アウトリーチとは 56	
(2) アウトリーチの重要性 57	
(3) アウトリーチを進めるにあたっての留意点 57	
4. インテーク	60
(1) インテークとは 60	
(2) インテークの重要性 61	
(3) インテークの目的 62	
(4) インテークにおける留意点 64	
5. 契約	67
第4章 ソーシャルワークの過程2 —アセスメントとプランニング	69
1. アセスメントの意味と方法	69
(1) アセスメントとは 69	
(2) アセスメントの目的 71	
(3) アセスメントにおける留意点 73	
2. プランニング	77
(1) プランニングとは 77	
(2) 支援目標 78	
(3) 支援計画 81	
(4) モニタリング後のプランニング 83	
(5) カンファレンス（支援計画会議） 83	
第5章 ソーシャルワークの過程3 —支援の実施から終結、事後評価まで	87
1. 支援の実施	87
(1) 支援の実施とは 87	

(2) ソーシャルワーカーの活動と役割	89
(3) 支援を実施していくうえでの留意点	91
2. モニタリング・効果測定・アフターケア	92
(1) ソーシャルワークの支援過程における位置づけ	92
(2) モニタリングとは	93
(3) 効果測定・評価とは	94
(4) アフターケアとは	95
3. 効果測定・評価の方法	96
(1) 実験計画法	96
(2) シングル・システム・デザイン	97
(3) その他の評価方法	98
4. シングル・システム・デザインのバリエーション	99
(1) A-Bデザイン	99
(2) A-B-Aデザイン	100
(3) A-B-A-Bデザイン	101
(4) B-A-Bデザイン	102
(5) 多層ベースラインデザイン	102
第6章 ソーシャルワークの記録	105
1. 記録の意味と目的	105
(1) 記録の意味	105
(2) 記録の目的	106
(3) 記録の種類	107
(4) 公式記録	108
(5) 非公式記録	111
2. 記録の方法と実際	111
(1) 記録の方法	111
(2) 記録の内容	112
(3) 記録の文体	112
(4) 記録作成上の留意点	116
3. 図表を用いた記録	118
(1) ジェノグラム	118
(2) エコマップ	119

第7章 ケアマネジメントの理解	125
1. ケアマネジメントとは何か	125
(1) 欧米におけるケアマネジメントの誕生と社会的背景	125
(2) 日本におけるケアマネジメントの発展	127
(3) ケアマネジメントの定義	128
(4) ケアマネジメントの意義と目的	128
2. ケアマネジメントの過程と留意点	129
(1) ケアマネジメントの過程	129
(2) ソーシャルワーク・ケアマネジメント実践	133
(3) ソーシャルワーク・ケアマネジメント実践の留意点	134
3. ケアマネジメントの諸モデル	137
(1) 代表的なケアマネジメントモデル	137
(2) 目的に応じたモデルの活用	140
第8章 グループワーク（集団援助技術）	143
1. グループワークとは	143
(1) グループワークの定義	143
(2) グループワークとは	144
(3) グループワークの理論的体系モデル	146
2. グループを構成する要素	147
(1) グループワーカーの役割	147
(2) 大きさと人数	148
(3) 時間（期間）	149
(4) 場面設定・環境づくり	150
(5) プログラム	151
(6) 言語	151
(7) グループの効果	152
(8) 役割を与える	153
3. グループワークの基本原則	154
(1) グループワークの14の原則	154
(2) グループワークの原則について	154
4. グループワークの展開過程	156
(1) 準備期	156
(2) 開始期	156
(3) 作業期	157
(4) 終結期・移行期	157

5. セルフヘルプグループ	158
(1) セルフヘルプグループとは	158
(2) ヘルパー・セラピー原則	159
第9章 コミュニティワーク	161
1. コミュニティワークの意義と目的	161
(1) 助け合いのなかで生かされる私たち	161
(2) コミュニティワーク	162
2. 「地域」を理解する	167
(1) 地域の全体像(要素)	167
(2) 地域における「圏域」	168
(3) 地域の担い手と組織	169
3. コミュニティワークの展開過程	172
(1) プロセスに入る前の準備段階	172
(2) 活動主体の組織化	172
(3) 問題把握	174
(4) 計画策定	175
(5) 計画実施	176
(6) 評価	176
第10章 スーパービジョンとコンサルテーション	179
1. スーパービジョンの必要性	179
(1) スーパービジョンの意味	179
(2) スーパービジョンの目的	181
2. スーパービジョンの機能	183
(1) 管理的機能	183
(2) 教育的機能	183
(3) 支持的機能	184
(4) 評価的機能	184
3. スーパービジョンの方法	185
(1) スーパービジョンの内容	185
(2) スーパービジョンの形態	188
(3) スーパービジョンの展開	194
(4) スーパービジョンのツール	197

4. コンサルテーション 199

- (1) コンサルテーションとは 199
- (2) コンサルテーションの構造 200

索引.....205

第1章 ソーシャルワークの理論

【学びの目標】

ソーシャルワークにおける問題解決は、クライアントのコンピテンスの発揮を支援することによって達成される。コンピテンスの状況はクライアントの生活を人と環境の交互作用としてとらえることで、理解することができる。この章では、クライアントの生活を人と環境の交互作用として理解するための理論となるシステム思考と生態学的視座の特徴を理解し、その両者を融合させたエコシステム視座について学ぶ。また、生活理解・支援の方法としてマイクロ・メゾ・マクロレベルのソーシャルワークについて学ぶ。

- ① ソーシャルワークにおいてクライアントの生活を人と環境の交互作用としてとらえる意味を学ぶ。
 - ② システム思考、生態学的視座、エコシステム視座の内容と特徴を学ぶ。
 - ③ ミクロ・メゾ・マクロレベルでの生活理解の方法を学ぶ。
-

1. ソーシャルワークにおける生活理解

(1) コンピテンス発揮の支援

ソーシャルワーカーが問題解決において果たす役割は、クライアントの問題解決能力をエンパワメントすることにある。エンパワメントはソーシャルワークに導入された当初、社会的に抑圧された人たちが、パワーが欠如した状態から回復することを支援する方法であった。しかし現在では、生活において起こる問題を、自ら解決する能力をクライアント自身が回復・維持・発見することを支援する方法として理解されている。

ソーシャルワークにおけるエンパワメントでは、問題解決の主体はクライアントであり、人間は誰でも社会で生活していくためにその人固有の問題解決の

能力をもっているという、人間の可能性を信頼した人間理解への価値観が前提となっている¹⁾。人間のもつその人固有の問題解決の能力をコンピテンスという。もともとコンピテンスとは、「心理学的な自我概念を、生活場面に具体的に投影し、自らのより良い生活を構築することへの意欲や自主的な態度」を意味している²⁾。人間はコンピテンスを発揮することによって、自分なりに調和のとれた生活をつくりあげているのである。

コンピテンスには、内的コンピテンスと外的・環境的コンピテンスがある³⁾。内的コンピテンスとは、環境の変化に対して、自らを効果的に機能させる適応能力のことである。これは知覚・知性・言語など、発生した状況の認識や予測、問題処理への対応能力に加え、本来の性格や生活経験から培われた思考や習慣などの特性から成るパーソナリティなどがあげられる。さらに、身体的・精神的健康も状況認識や対処方法に大きな影響を与えるところから内的コンピテンスと考えられる。

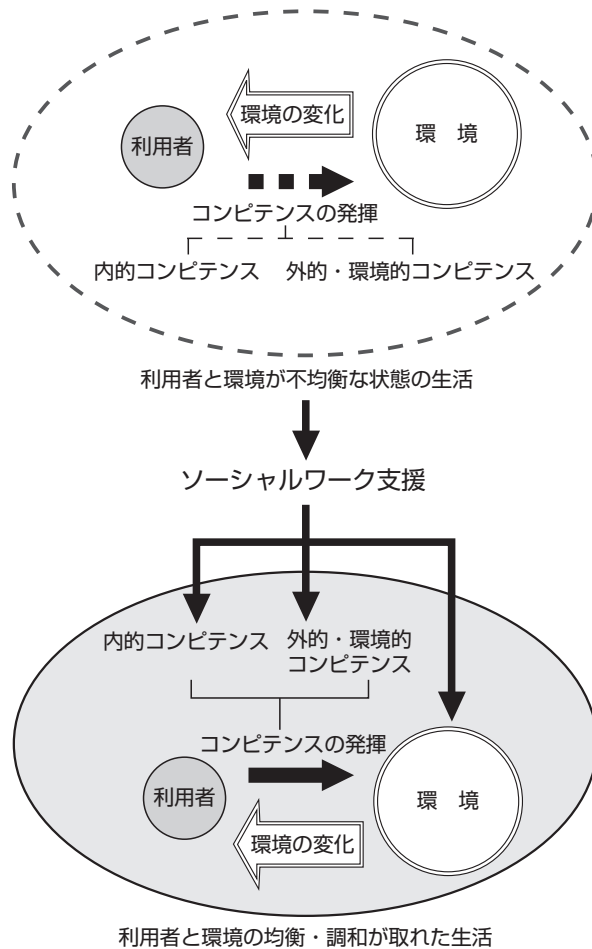
一方で人間は、環境の変化に適応するため自らの保有する社会資源を活用する外的・環境的コンピテンスをもっている。経済力や家族・職場・近隣などの人間関係、制度的支援や地域支援などの社会資源やネットワークを活用し、よりよい生活をつくりあげる能力をもっている。これが外的・環境的コンピテンスである。このようにコンピテンスは、個人の内面的な知的・心身的・経験的・属性的な能力とともに、社会資源としての環境も含んだ概念である。ソーシャルワークにおける問題解決は、問題解決に有効なコンピテンスの発見とその発揮を促進することによって、クライアント主体の問題解決を支援する発想にある。

(2) 人と環境の交互作用

クライアントを取り巻く環境は、時間とともに常に変化する。クライアントは、この変化にコンピテンスを発揮し、自らの変革と環境への働きかけによって適応する。その繰り返しの過程がクライアントと環境の交互作用となり、クライアントの均衡・調和がとれた生活がつくりあげられていく。

しかし、何らかの原因によってコンピテンスの発揮が妨げられ、クライアントと環境の交互作用のバランスが崩れてしまう場合がある。ソーシャルワークでは、このクライアントと環境の交互作用における不均衡を問題解決の焦点とする。クライアントと環境の交互作用においてコンピテンスが発揮されるよう支援することによって、クライアントと環境の不均衡を解消し、生活の均衡・調和の回復・維持をめざすのである。図1-1はソーシャルワークにおけるク

図1-1 コンピテンスを発揮する支援のイメージ



出典 太田義弘 編『ソーシャルワーク実践と支援科学』相川書房 2009年 p.25

クライアントのコンピテンスを発揮する支援をイメージしたものである。環境の変化に対応するためのコンピテンスが十分に発揮できないために、クライアントと環境のバランスが不均衡なクライアントの生活状況に対して、そのバランスがとれるよう内的コンピテンスと外的・環境的コンピテンスに働きかける支援を行う。また、社会資源の開発や制度・政策の改善・策定など、環境へ働きかけることによって、クライアントがコンピテンスを十分発揮できる条件整備をする。

コンピテンスの発揮を支援するためには、クライアントと環境との間に起きている問題状況の把握が必要であり、何がクライアントのコンピテンスの発揮の妨げになっているのかを理解しなければならない。クライアントを取り巻く

環境は非常に多様な要素から構成されており、クライアントと多様な要素との複雑な交互作用によって、生活は成り立っている。そのために、ある一つの要素とクライアントとの交互作用のバランスが何かのきっかけで崩れてしまうことで、他の要素とクライアントとの交互作用のバランスも崩れてしまうという連鎖が引き起こされる。クライアントと環境との間に起きている複雑な状況を理解するためには、クライアントの主訴や表面的な困難を理解するだけでなく、他の生活要素も広く視野に入れた、生活全体への視点をもった問題理解が必要となる。クライアントは本来、幅広い内的コンピテンスと外的・環境的コンピテンスを保有している。生活問題が生じている状態においても、自らの生活をつくりあげるためのコンピテンスを十分にもっている。問題解決に向けたコンピテンスの発揮を支援するためには、ソーシャルワーカーはクライアントのもつ問題解決の可能性を十分に理解していないといけない。

(3) 固有な生活の全体的理解

ソーシャルワークの問題解決には生活への全体的な視点が必要であるが、これはクライアントの生活の固有性を無視して成り立つものではない。ソーシャルワークにおける問題解決は、クライアントのためのものであり、平均化や一般化した問題状況やとらえ方では意味がない。クライアントの固有性を尊重し、クライアントの生活においてもその固有性をふまえたとらえ方が必要となる。ソーシャルワークにおいてクライアントの生活は、クライアントとそれを取り巻く環境との交互作用としてとらえられるが、クライアントと環境の交互作用にはクライアント独自の秩序があり、その固有な秩序によって生活の均衡・調和が成り立っている一つの世界として考える。

クライアントの生活には、クライアント独自の広がりと流れがある。人間の生活はさまざまな要素が複雑に結びついて成り立っている。生きていくなかで培ってきた考え方や習慣、心身の健康、家庭や近隣、職場や学校、そこでつくられる家族や隣人、同僚、友人といった人間関係などである。そして、それらの要素は互いに影響し合い、複雑な関係を構成している。生計を維持するための職場の環境は経済状況と関係し、経済状況によって住まいの環境が異なってくる。そしてその住まいの環境は近隣の人間関係に関係している。このように、生活の諸要素は互いに直接的・間接的な連鎖関係をもっている。つまり、生活の要素がそれぞれの関係において影響を与え合い、関係を変化させ、その変化が別の要素に影響を与えることで生活の状況が刻々と変化していく。例えば家族の転勤が決まり、職場に通うために住まいを移す。住まいを移すことで近隣

管理法、ネットワーキングなどを活用する。マクロレベルでは、地域福祉の増進を図るために活用する技法として、コミュニティワーク、社会活動法、社会計画法などがあげられている。

中村は表1-4のようにマイクロシステム、メゾシステム、エクソシステムにおけるソーシャルワーカーの支援として、①相談支援(カウンセリングを含む)、②直接的サービスの提供、③直接的介助やケア、④教育・指導的支援、⑤情報提供支援、⑥グループワーク、⑦ケアマネジメント(新しい人や直接接触する資源の導入、調整、改善)、⑧ソーシャル・ネットワークの強化、⑨弁護的支援(権利擁護や代弁機能を含む)をあげている。また、マクロシステムにおける支援としては、①組織の変革、②資源改善についてのコンサルタント、③資源のネットワーキング、④資源の動員や開発、⑤新たな法・政策の計画立案、⑥権利擁護への運動をあげている¹³⁾。

マイクロ、メゾ、マクロの各レベルで展開される支援は対象や実施主体が異なる場合もある。支援の対象をマイクロ、メゾ、マクロに分類して理解する発想は、対象を連続するシステムとして理解して包括的・統合的に支援することを目的としている。したがって、各レベルでの支援の展開に加えて、チームによる支援など各レベルでの支援が連続性をもった包括的・統合的な支援となるような方法・技術の展開が課題となる。

【学びの確認】

- ①ソーシャルワークにおいて、クライアントの生活を人と環境の相互作用としてとらえる意味を考えてみましょう。
- ②システム思考、生態学的視座、エコシステム視座の内容と特徴をまとめてみましょう。
- ③マイクロ・メゾ・マクロレベルの対象と支援方法の特徴をまとめてみましょう。

【引用文献】

- 1) 太田義弘・佐藤豊道編『ソーシャル・ワーク 過程とその展開』海声社 1984年 p.52
- 2) 太田義弘『ソーシャルワーク実践とエコシステム』誠信書房 1992年 p.51
- 3) 太田義弘・秋山薊二編『ジェネラル・ソーシャルワークー社会福祉援助技術総論』光生館 1999年 pp.130-133
- 4) 前掲書3) pp.44-46
- 5) フォン・ベルタランフィ著、長野敬・太田邦昌訳『一般システム理論』みすず書房 1973年 p.35
- 6) 前掲書3) pp.47-48
- 7) 前掲書2) p.97